

序論)

みなさん、クリスマスおめでとうございます。私達はこの一ヶ月、旧約聖書の預言書からイエスキリストの御降誕について学んできました。今日は新約聖書のヨハネの福音書から、イエス・キリストの御降誕について教えられていきたいと思えます。

さて、新約聖書には4つの福音書があります。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。この4つの福音書ですね。この中で一番、クリスマスの出来事を詳しく書いているのがルカの福音書。次にクリスマスの出来事が書かれているのがマタイの福音書です。マルコの福音書に至っては、イエス様が処女マリヤから生まれたとか、羊飼いたちに御使いからのお告げがあったとか、東方の博士たちが生まれたばかりのイエス様を礼拝しにきたとか、そういったクリスマスの出来事が一切、書かれていません。

ヨハネの福音書はどうかというと、処女降誕とか、御使いの知らせとか、東方の博士たちとか、そういうことが書かれていないのはマルコの福音書と同じなのですが、ヨハネの福音書は出来事というよりは、クリスマスの意味を私達に伝えようとしています。つまり、ベツレヘムで処女マリヤから救い主がお生まれになったということは、どのような意味があるのか。そこを中心に語っているのが、ヨハネの福音書の特徴です。

では、ヨハネはクリスマスの出来事をどのように語っているのか、みことばをみていきましょう。

1) ことばの受肉

ヨハネはクリスマスの出来事の意味を一言で表現しています。それがこのことばです。

1:14a ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。

ヨハネにとってキリストの降誕は、「ことばが人になった」出来事であり、その意味は、ことばが「私達の間に住みた」ということでした。

ここでいう「ことば」というのはイエス様のことですが、なぜ、ヨハネはイエス様のことを「ことば」といっているかということ、この言い方はイエス様が人間にな

る前の状態を示しているからです。イエス様は、人間になる前どのような状態で、何をなさっておられたのでしょうか。ヨハネの福音書1章1節から4節をみるとこのように書かれています。

1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。

1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

つまり、人になる前のイエス様がどのような状態で何をされていたかという、すべてのはじまりから神様と共におられ、この世界のすべてをお造りになり、いのちと光をもっておられたのです。

こんなことができるのは、神様以外には不可能です。だから、ヨハネは人になる前に神様と共におられたイエス様のことを、「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」(1節)と書いています。

つまり、人になる前のイエス様は、神として、この世界のすべてをお造りになり、いのちと光をもっておられたというわけです。

で、その神であるイエス様がどうされたかという、「人となって、私達の中に住まわれた」のです。ギリシャ語を調べてみると、この「人となる」ということばは、「肉になる」ということばが使われています。つまり、主イエスキリストの御降誕は、神であるお方が肉を身にまとった日であるということが出来るわけです。

神であるお方が肉を身にまとったわけですから、この方は別に神をやめているわけではありません。主イエスキリストは完全な神であり、完全な人としてこの世にお生まれになったのです。

なんのために？ 「私達の中に住まわれる」ためです。この「住む」ということばも、ギリシャ語を調べてみると「テントを張る」という意味のことばが使われています。旧約聖書時代、神様はイスラエルをエジプトから連れ出して、過酷な荒野を旅するとき、イスラエルの人たちが神様を礼拝し、神様に祈れるようにするために、「会見の天幕」と呼ばれる特別なテントをつくっていただきました。

でも、その「会見の天幕」というのは、罪深いイスラエル人たちが神様を感じるようにする。神の国の神殿の模型なので、本当に神様とお会いして親

密に食事をしたり、お話をしたりして過ごすことは出来ませんでした。

でも主イエスキリストの御降誕は違います。神であるお方が、私達と同じ肉を身に纏って完全に人間になってくださったので、私達人間は神であるお方と一緒に食事をし、交わりをし、お話をし、神様を一番身近で知ることができるようにされたのです。それがヨハネの福音書がいうところのクリスマスの意味なのです。

## 2) 2つの証言

ヨハネは、これが間違いのない事実なのだということを証明するために、2つの証言を語ります。それが14節の後半と15節です。まずは14節から読みましょう。

**1:14b 私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。**

ここでいう「私たち」とはヨハネをはじめとする。イエス様とこの世でずっと共に歩んだ。12弟子たち。一番初めの弟子たちのことです。主の弟子たちはイエス様の栄光をみました。その「栄光」とは、単純にイエス様の光り輝いた姿ということではなくって、私達を救うためになされたイエス様の宣教、十字架、復活の出来事のことです。特に福音書で「栄光」というときは、イエス様の十字架のことを指していることが多いです。

この福音書の著者ヨハネは、「私達は、間違いなく神であるお方が、私達のためにみことばをかたり、十字架にかかって犠牲を払い、復活し、私達を救ってくださった。その栄光のみわざを見たのです」と、ここで証言しているのです。

みなさん、主イエスキリストが私達を救うための十字架と復活をなされたのは、紛れもない事実なのです。そして、そのような救いのみわざを、神であるお方が人になって実行してくださったから、ヨハネはこのキリストの中に「恵みとまことが満ちておられた」と語っています。

この「恵みとまこと」については、あとで出くるので、その時に詳しくお話します。

福音書の著者ヨハネが語るもう一つの証言はなにかというと、ヨハネ自身の証言ではなくって、紛らわしいですけども。バプテスマのヨハネの証言を15節で語っています。バプテスマのヨハネというのは、イエス様が活動を始める前に、人々に悔い改めのメッセージを語って、人々に洗礼を授け、イエス様のための準備をした人

です。彼はイエス様についてなんと語っているのでしょうか。15節をお読みします。

**1:15** ヨハネはこの方について証して、こう叫んだ。「『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。」

著者ヨハネがバプテスマのヨハネのことばを引用して、バプテスマのヨハネが自分が昔語った言葉を引用するという二重引用になっているのでちょっとわかりにくいかもしれませんが、要は、バプテスマのヨハネは、イエス様のことを自分よりも優れた方と紹介しつつ、「この御方は、自分よりも前に存在していた。創造主なる神様です。」と証言しているのです。

実際に生まれた順番でいうとバプテスマのヨハネは、イエス様より先に生まれているので、人間的に考えるならば、イエス様がバプテスマのヨハネよりも先におられたなんてありえません。でも、なんで先におられたとっているかということ、バプテスマのヨハネもまた、イエス様がこの世のはじめから存在されていた神様だったということを知っていたからです。

この福音書を書いたヨハネは、自分たちの証言とバプテスマのヨハネの証言によって、『間違いなく神であり、父なる神様のところから来られたお方が、私達のところに来て、十字架の贖いという救いの栄光を見せてくださったのですよ。』と強調しているのです。

みなさん、だからクリスマスは、神なるお方が私達のところに来てくださった日なのです。

### 3) 受肉の恵み

そして、神様が私達のところに来てくださった。ということには、大きな大きな恵みがあります。ヨハネはそのことを16節でこのようにいっています。

**1:16** 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。

イエス様は神様ですから、イエス様はこの地上のあらゆるものを持っておられます。でも、ここでヨハネがいたいのは、お金もちのイエス様から色々なものを奢ってもらった。というような恵みではなくって、イスラエル人たちが尊敬している

モーセには与えることができなかつた恵みを自分たちは与えられたのだ。と言っています。17節をお読みします。

**1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。**

律法というのは、神様と共に歩むためには何をしなければいけないかを教えてくれるものです。実際、律法には「盗んではいけない」「殺してはいけない」「姦淫してはいけない」とか、「安息日を守ってこれを聖としなさい」とか、当時の人がなすべき行いが書かれています。ただ問題が一つあって、「人間にはこの律法を完全に守ることはできない。」という問題です。人は神様が求めている行いを完全に実行することはできません。だから、律法を完全に守ろうとすればするほど、自分はそれを守れない罪人である。ということがよく分かるようになっていきます。

つまり、律法は、私達が罪人であることを自覚させるためのものなのです。モーセはその私達の罪を示す律法を与えました。

それに対して、神である主イエスキリストは何を人々の中に実現させたかという、「恵みとまこと」が私達の中に現れるようにしてくださったのです。

では、その「恵みとまこと」とはなんでしょう。

「恵み」というのは、本来は受け取る資格のないものが一方的にプレゼントを与えることです。律法的にいうと、私達は律法の命令を守ることができないので、本来、神の民になることができません。

でも、神なるイエスキリストの中には、「本来は受け取る資格のないものに、一方的にプレゼントを与える」「恵み」が満ち溢れているので、罪人である私達が、神の民とされ、神の子とされることが出来ます。それがイエス様がもっておられる恵みです。

では、「まこと」とは何かというと、このことばは「真理」とか、「真実」と訳すことができますが、イエス様は言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」

つまり、「まこと」とは何かというと、父なる神様のところへいくための道であり、いのちであるイエス様ご自身のことです。

わかりやすくするために、ここでは神様のところへ行くための道とします。

この世に来られた神様であるイエス様には、私達が神様のところへいくための「道」が、しっかり用意されています。

だから、私達はイエス様によって、神の民、神の子とされるだけでなく、父なる神様のところに行くことができるわけです。

本来、神様なんて会えるはずのない罪人である私達は、イエスキリストの恵みと、イエス・キリストが用意された「まこと」であるその道によって、神様と出会い、神様と交わるようにされたのです。

みなさん、これはですね。私たちの頑張りによって与えられた報酬ではなくって、主イエスキリストによって実現した神様の救いの御業なのです。

つまり、クリスマスというのは神様の救いの御業が私達のところに実現した出来事なのです。

ヨハネは、これは本来、あり得ないはずの特別な恵みだということを強調するために、「**恵みの上にさらに恵みを受けた**」と言っています（16節）。

#### 4) キリストの受肉の理由

だから、クリスマスというのは本来、ありえないはずの恵みが現れた日なのです。なんで「ありえない」といえるのか。18節をお読みしましょう。

**1:18** いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

「いまだかつて神をみたものはいない。」神様は霊なるお方であり、聖なるお方ですから、私達は、神様を見ることはできないし、神様と面と向き合って交わるなんてことはありえないお方です。

旧約聖書でモーセが「私は神と顔と顔をあわせた」っていっていますが、そのモーセでさえ、実際に彼がみたものは神様が通り過ぎていく後ろ姿だけでした。神様がモーセに、わたしをみたらあなたは死んでしまう。とそのようにいわれたからです。私達と神様との関係は、それだけの絶対的な隔たりがあります。

でも、その神様のふところにおられたひとり子の神が、私達に神様を解き明かしてくださいます。つまり、神様が神様を教えてくださいますのです。

みなさん、これほど正確に神様を知ることができる方法はほかにあるでしょうか？ 絶対ないですよ。

神様が、神様を教えにきてくださった日。それがクリスマスなのです。

## まとめ)

みなさん、つまり、クリスマスという日はどうゆう日でしょうか。

神であるお方が、人になって、私達の間に住み。

一方的に救いを恵みとして与えてくださり、私達が神様のところへ行く道が、現れた日、それがクリスマスです。

だから、私達はキリストを通して神様を知ることができます。

みなさんは今、神様を実感しておられるでしょうか。

この世の忙しきで、立て続けにおこる目を覆いたくなるような暗いニュースがあるなかで、神様を見失っていないでしょうか。

神である主イエスキリストは、そんな私達に神様を教えるためにこの世に来てくださった神様です。このキリストを通してますます主なる神様を知り、神様と深い交わりを持つものとなっていきましょう。